

令和元年 11 月 18 日

松阪市議会議長

大平 勇様

市民クラブ

楠谷 さゆり

「自然保育の進め方と  
森のようちえんの教育効果」

研修報告書

日時：令和元年 11 月 17 日（日）

場所：グリーンプラザおおだい

主催：NPO法人 大杉谷自然学校

講師：内田幸一氏（認定こども園 野あそび保育みっけ園長、

NPO法人森のようちえん全国ネットワーク

連盟理事長、長野県野外保育連盟理事長）



## 目的

デジタルツールの発達によって、幼い子どもたちもスマートフォンやゲームなどに費やす時間が増えた。屋外での遊びをあまり経験しない子どももいるため、自然環境の中で危険の認知度が低い、また環境問題について関心の低いおとなが増えていかないか不安である。そんな中、「野外保育」、あるいは「森のようちえん」といった保育の形態が注目を集めている。森のようちえんは10年ほど前からようやく全国各地に広がりを見せてきたが、1980年代前半からこれを提唱し実践してきた内田氏の研修は、今後の実践的な保育のヒントとして有意義だと思われる。

## 研修内容

### ○グループワーク

参加者が6～7人のグループに分かれ、自己紹介の後、自分の幼児～小学校低学年期の記憶やエピソードを披露する。その後、現在の自分に幼児期の体験がどのように影響しているか考えるかを発表する。すると、はっきり記憶していなくとも、潜在意識の中に、人間の一生に影響している幼児体験が隠されていることが推測できる。逆に考えれば、幼児期の過ごし方によって、その人の人生における考え方や世界観が変わってくることはほぼ間違いないであろうことがわかる。

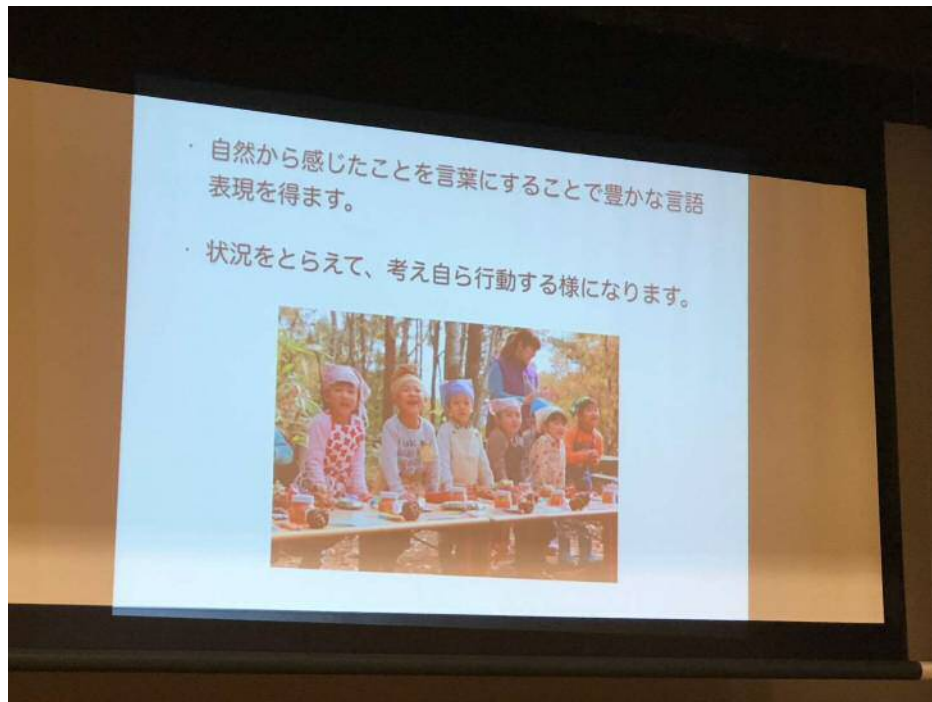
### ○講演：森のようちえんの目指すもの

これからの地球は、過去の問題と同じではない。地球上の資源やエネルギーには限りがあり、再生産や循環できる資源、エネルギーの使い方が求められ

る。また、温暖化や気候変動、食糧生産、環境破壊、人口問題、紛争や戦争、平和維持や生活を支える経済活動など、地球上全てのことが複雑に絡み合っ様々な問題を起こす時代となる。それは科学や技術革新だけでは解決できない難問である。将来そんな時代に生きていく今の子どもたちは、次の学童期に学習する系統的な教育内容の前段階としての児童教育だけで良いのかという不安が起こる。

幼児期に自然と近い関係にあった子どもは、その後においても自然と近い関係を持ちやすく、森のようちえんを卒業した青年たちは、自然や環境に対して関心が高く、人道的な意識の強い人間に育っている。

これからの困難を極める地球環境を考えていく上で、また、様々な垣根を超えた共存協調の立場に立って、民主的に議論を尽くし、多くの英知による問題解決の道を拓いていくためには、自立と主体性を伸ばす教育が小さい時から必要である。自然の中で、子ども自身が子どもの裁量で遊ぶことのできる意義は、この主体性を育てるのに最適な環境であるということである。



## 所感

内田氏は、保育園で朝集まった時に、必ず子どもたちに欠席者の名前を言わせるという。そのことには、休んでいる子も今見えないだけで、存在していることを子どもたちに感じさせる。それを繰り返すことで、居ない子を意識させ、居ない子のことに想いを馳せる思いやりを育てているのだ。

思い返せば、昔は休んだ子の家に給食のパンを持って行かされたものである。現在は、給食の持ち帰りはさせていないだろう。しかしながら、確かにパンを届ける行為で、休んだ子の存在を確かめることができたのである。

野外保育で地球環境に関心を寄せる人間を育てることができるのも、また、自然の中で子どもたちの裁量で遊びができることが自主性を育てるのも、その場に居ない人への思いやりを育てるのも含めて、森のようちえんが、生きるのに逞しい子どもを育てる以上の意味を持っているのが納得できる貴重な研修であった。

以上

